

三条市歴史民俗産業資料館（旧武徳殿）建造物調査報告書

1 調査の概要

- (1) 調査目的 三条市歴史民俗産業資料館として使用している建造物は、武徳殿として昭和10年に竣工した市内に残る貴重な歴史的建造物であり、今後の保護・活用を図るための資料を整備するため。
- (2) 調査日 平成18年3月25日(土)～3月26日(日)
- (3) 調査担当者 山崎完一(元新潟市文化財保護審議会委員(建造物)、加茂市史編集委員)
- (4) 調査員 西澤哉子(長岡造形大学研究員)

2 建造物の概要

- (1) 名称 さんじょうしれきしみんぞくさんぎょうしりょうかん きゅうぶとくでん
三条市歴史民俗産業資料館(旧武徳殿)
- (2) 員数 1
- (3) 所在の場所 新潟県三条市本町三丁目990番地1
- (4) 構造及び形式並びに大きさ 中央展示棟(旧武道場):入母屋造平入 棧瓦葺
玄関:唐破風 棧瓦葺
談話室(旧弓道場):切妻造 棧瓦葺
名誉市民岩田正巳画伯記念室(旧貴賓室):切妻造
棧瓦葺
裏玄関:切妻造妻入 棧瓦葺
建築面積 673.95㎡(文化財調査該当部分)
- (5) 所有者 三条市
- (6) 所有者の住所 新潟県三条市旭町二丁目3番1号
- (7) 建築年代 昭和10(1935)年(但し裏玄関は昭和24(1949)年)

3 創立と沿革

三条市歴史民俗産業資料館(旧武徳殿)は信濃川東岸一帯の三条市街に位置し、北三条駅前を通る市道興野北三条線から南に入る市道公民館北通り線沿いに東面して建つ。

建築当初は武徳鍛錬の場として建築された。武徳殿とは戦前戦中時期において、日本各地で建設された武徳殿堂の建物である。

創設は昭和8(1933)年、三条町(当時)の有志により武徳殿建設が計画され、翌昭和9(1934)年に三条町の市制施行を契機に、顧問に三条出身で当時陸軍大将であった鈴木荘六を顧問、三条出身実業家の今井雄七(当時北海道丸井百貨店社長)を発起人に武徳殿建設計画が具体化した。

今井雄七の3万5千円の寄附を始め、市内外の有志による寄付金4万5千円を得て、昭和10(1935)年2月20日に起工し、同年7月19日に竣工した。竣工式と同時に、鈴木荘六の胸像除幕式も行われ、翌7月20日には、武徳殿のこけら落としとして、大日本武徳会新潟支部主催の近県武道大会が開催された。

竣工当初の武徳殿は唐破風の玄関より入り、正面に武甕槌命(たけみかづちのみこと)を主神とする

鹿島神宮（武神として崇拝されている）を祭り、南側に剣道場、北側に柔道場、柔道場西北側に弓道場を配し、剣道場の東南側に貴賓室を配した。

戦後の武徳殿は、一時連合軍に接収されたが、昭和 22（1947）年からは公会堂、昭和 24（1949）年からは三条市公民館として使用された。その後、昭和 56（1981）年には青少年育成センターとして使用され、58（1983）年には現在、道路を挟んで西側に位置する市立図書館の新館建築工事の際に、一部図書館として使用されたこともあった。

平成元（1989）年に青少年育成センターの移転により、武徳殿の建物は歴史民俗産業資料館として用途を新たにして、現在に至る。

4 敷地の状況

敷地は三方を市道で囲われ、隣接して東本願寺三条別院、市立図書館がある。

敷地形状はやや変形した正方形に近く東南隅の一角に食い込む形で三条市青少年育成センターが設置されている。

建物の正面は東を向き、東側の主出入口より前庭を経由して玄関に至る。なお、敷地東北部は現在、駐車場であり、北側道路よりの脇出入口がある。

5 建物の配置

中央展示棟（旧武道場）が南北に長い平面で敷地の中央やや奥まった位置にあり、東側に唐破風形式の玄関が突出する形で設けられる。

この中央展示棟の西北隅には東西に細長い形で談話室（旧弓道場）が角を接する形で配されている。また、その対面、南東隅には三条市名誉市民岩田正巳画伯記念室（旧貴賓室）があり、そして中央展示棟北側には本体より突出する形で裏玄関があるが、現在は収蔵室として利用されている。

6 各棟の間取りと構造手法

（1）中央展示棟（旧武道場）

桁行 29.12m、梁間 16.38m、入母屋造棧瓦葺平入、正面屋根中央に千鳥破風を設け、周囲に下屋を回し、正面中央に唐破風の玄関ポーチが配される。

間取り

本体中央に円柱によって支えられている大空間（旧武道場）の部屋を設け、その周囲に廻廊をまわす。この大空間は、当時は中央正面奥に神殿を設け、向かって左を剣道場、右を柔道場として使われていたとされる。廻廊の幅は正面（東側）と両側（南・北側）が 9 尺（2.73m）で背面のみ 12 尺（3.64m）である。そのため、瓦屋根の隅降棟が 45 度に設けられているため、本体（以下上屋と称する）の隅円柱から外れている。また、背面廊下の化粧天井隅木は 45 度の角度ではなく振隅で納まっている。

外観

上屋屋根は入母屋造、棧瓦葺、両妻面は猪の子扱首方式で千鳥破風とし、蕪懸魚^{カブラダギョ}をつける。正面中央の妻飾は木連格子^{キヅレ}で千鳥破風、梅鉢懸魚を設ける。軒は一軒平行疎ら垂木とし、円柱の上に舟肘木をのせ、桁を支える。高窓は障子引違の外側に堅格子を設ける。下屋は上屋の四方に棧瓦葺の片流屋根で、四隅に降棟を置く。土台の上に方（角）柱を建て桁を支える。軒は一軒平行疎ら垂木、腰高の引違戸を入れ、その上に菱欄間を設ける。腰長押をつけ、真壁構造の堅板羽目を張る。基礎の仕上げは人造石洗出し仕上げとし、地盤面より約0.9mが天端である。

玄関

唐破風屋根を棧瓦で葺く。四隅に3本固めた方柱（ペアカラム方式）を建て、頭貫を通す。その先の木鼻は大仏様でその変形である。頭上は大斗肘木形式とし桁を支える。

中備えは本墓股の上に巻斗をのせ、実肘木を組合わせて桁を支える。軒は一軒平行疎ら垂木とし、正面の唐破風面は太瓶束によって棟木を支えている。この太瓶束は墓股方式の鰭をつけている。棟先端には蕪懸魚をつける。柱内は格天井としている。

内部

四周の廻廊は展示室としてパネル等で覆われて、目視によりその全体を見ることはできない。但し、柱上部が表しで出ていることから大きな改造は受けていないと考えられる。上屋部分（中央展示室）の内法より上部は軸部構造体そのまま表され、下より内法鴨居、飛貫、上部高窓の腰長押、円柱の上にある舟肘木が保存状態の良い形で目視できる。なお、天井は格天井である。

（2）談話室（旧弓道場）

桁行 15.47m、梁間 5.46m、切妻造棧瓦葺妻入。棟は東西方向である。

この棟は三室に分けられ、東側より前室、射場、観察室（仮）がある。中央展示棟の北西隅より階段を降り前室に至る。現況は物置によって仕切られているが、当初は一室であり、棹縁天井が一連の形でつながっている。中央の射場は奥行4間（72尺・7.28m）で南面に掃出しの開口部が設けられ、中央展示棟の裏の的場に向かって矢を射ていた。天井は格天井である。その反対の北側は出窓形式とし腰棚を設け、腰高窓を配する。最奥の観察室（仮）は奥行2間半（15尺・4.55m）で棹縁天井である。外観は方柱で桁を支え、一軒平行疎垂木である。妻面は千鳥破風とし、中央に小屋束を立てている。この棟の意匠は中央展示棟と比して質素である。

（3）岩田正巳画伯記念室（旧貴賓室）

桁行 6.37m、梁間 5.46m、切妻造棧瓦葺妻入。

中央展示棟の東西隅に接続する。

展示廻廊より床を一段と高くし、階段を設け、前廊下を経て記念室に至る。前廊下は棹縁天井である。記念室は幅 5.46m (3 間・18 尺)、奥行 4.55m (2.5 間・15 尺) で格天井である。南面には床の間、棚を整え、床の間の脇には火頭窓付きの出書院を設けている。また、椅子式を反映してか床の間の床板が室内の床よりも約 60 c m 高く設けてある。東、北面は腰高の窓があり、上部に堅格子の欄間がつく。壁面は窓上のみ内法長押をつけ、上部に蟻壁長押を四周にまわしている。腰は堅板羽目とし巾木をまわし、全体に和風を基調としながらも、椅子式や腰板等に洋風の要素を盛り込んでいる。

外部は地盤面より約 1.65m 高の基礎を設け、人造石洗出し仕上げである。土台をまわし、方柱によって桁を支える。軒は一軒平行繁垂木とし、妻面は千鳥破風の中央に梅鉢懸魚を設ける。南面の妻組は猪の子扱首、北面は単なる束立方式である。東面、北面開口部の上には庇を設け、高欄、戸袋がつき、堅板の腰羽目を回し、中央展示棟の玄関と同様にその意匠は豪華である。

(4) 裏玄関棟

桁行 5.46m、梁間 6.37m、切妻造棧瓦葺妻入。

中央展示棟西側に突き出すような形で設けられ、他の棟が和風を基調としてののに対し、内部は洋風の色彩が強い。昭和 24 (1949) 年三条市公民館として使われた頃の増築と伝わる。

間取りは東側に収蔵庫 (旧事務・受付か) を設け、当時は二室に別れていたと思われる痕跡が残る。西側は玄関として北側よりの出入りがあるが、外階段の他に内階段も設けられている。二室とも格天井で開口部も柱と窓台、まぐさのみで装飾は一切なく、質素な仕様である。近年若干の改造の手が入っているが旧規は保たれている。

7 当時の新聞による旧武徳殿の紹介 (抜粋)

(1) 『新潟新聞』 昭和 10 年 7 月 19 日

写真として全体の外観写真、武道場の内観、貴賓室、神殿が掲載されている。

外観写真には裏玄関はなく、現在の中央展示棟、記念室、談話室が写されている。武道場の内観写真は現況の通りで、展示装置を取り除くとほぼ写真通りの内観が現れるであろう。

貴賓室内観写真もほぼ現況通りで市松模様の床が撮影され、テーブルと椅子が配されている。

神殿は正面より撮影したものであるが、現存していない。背面西側の廻廊が他の三方と比して半間 (3 尺・0.91m) 巾が広いのもこれらの要素が影響しているものと考えられる。

(2) 『北越公論』 昭和 10 年 7 月 19 日

当時の武徳殿建設と三条市出身の旧帝国軍人鈴木荘六大将 (当時大日本武徳会長) の銅像建立の概要が掲載されている。

なお、旧書体の漢字は当用漢字に、漢数字はアラビア数字に書き改めた。

武徳殿 銅像 沿革

▲ 総工費 4万5千円

武徳殿工費 3万5千円

銅像工費 5千円

設備費、敷地造成費、移転費その他 5千円

基本金 1万円

▲ 武徳殿 総坪数 244坪

本殿 144坪5合

玄関 7坪5合

弓道場 24坪5合

的場 4坪（現存せず）

貴賓室 10坪5合

付属室（来客室、事務室、湯殿、便所） 39坪（現存せず）

住宅 15坪（現存せず）

▲ 本殿入母屋千鳥破風造、貴賓室、同上

玄関、入母屋唐破風造

設計 東京来田組（施工は三条市内、高野熊次郎）

▲ 銅像 大理石

設計 竹石幸三郎

画案 廣川松五郎

建築 高野組

▲ 昭和9年10月13日、地鎮祭

10年2月20日 柱立式

同年3月26日 上棟式

同年5月3日、鈴木大将銅像起工式

同年7月6日、銅像建設竣工

同年7月6日、武徳殿竣工引継す

8 まとめ

近代和風建築の中に入る武徳殿の類例として重要文化財仏教美術資料研究センター（奈良市、竣工明治35年）が掲げられる。

設計者は日本東洋の建築史研究の大家関野貞である。外観は平等院鳳凰堂のような左右対称としている。基礎を高く立上げ、真壁造の方柱を建て、堅腰壁をまわし、軒は一軒平行疎垂木、棧瓦葺とし、正面中央に唐破風の玄関を設けている。細部意匠は要所に寺院建築に用いられる斗組や臺股、高欄を取り入れるが、その形は日本建築史を十分理解している設計者として極めて洗練されている。また、外部に上下窓や二階にアラビア風の開口部を用いるなど外国の様式も若干であるが用いられている。

全体に簡素な仕様であるが、骨格の太さや、屋根の形、軒の構成、そして的を得た細部意匠の配置等、全体の構成は雄大でかつ力強い。

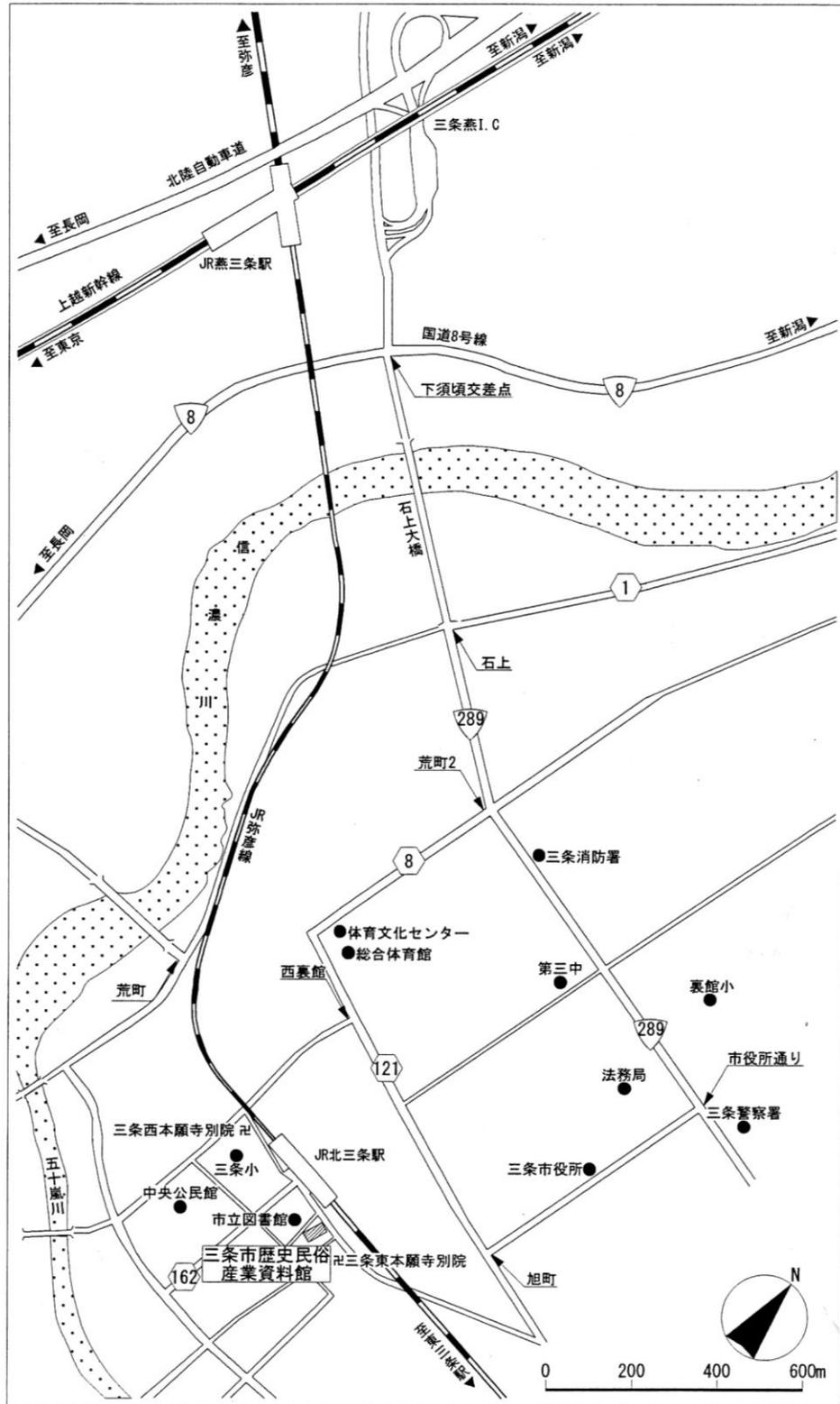
旧武徳殿もこれに類するものである。外部意匠の構成は奈良市のそれとほぼ同じで、洋風の意匠として、中央展示棟玄関のペアカラム方式、貴賓室の市松模様の床板や腰板組があり、寺院風としては斗組、臺股が、そして旧貴賓室、旧弓道場、正面玄関の妻面の軒の出が棟より桁において若干絞り込む意匠が、近世期のそれとは異なる洗練された意匠が配されている。

近代和風建築の主体は書院座敷に代表されるものとの視点があるが、それとは明らかに異なる類の様式であるといえる。

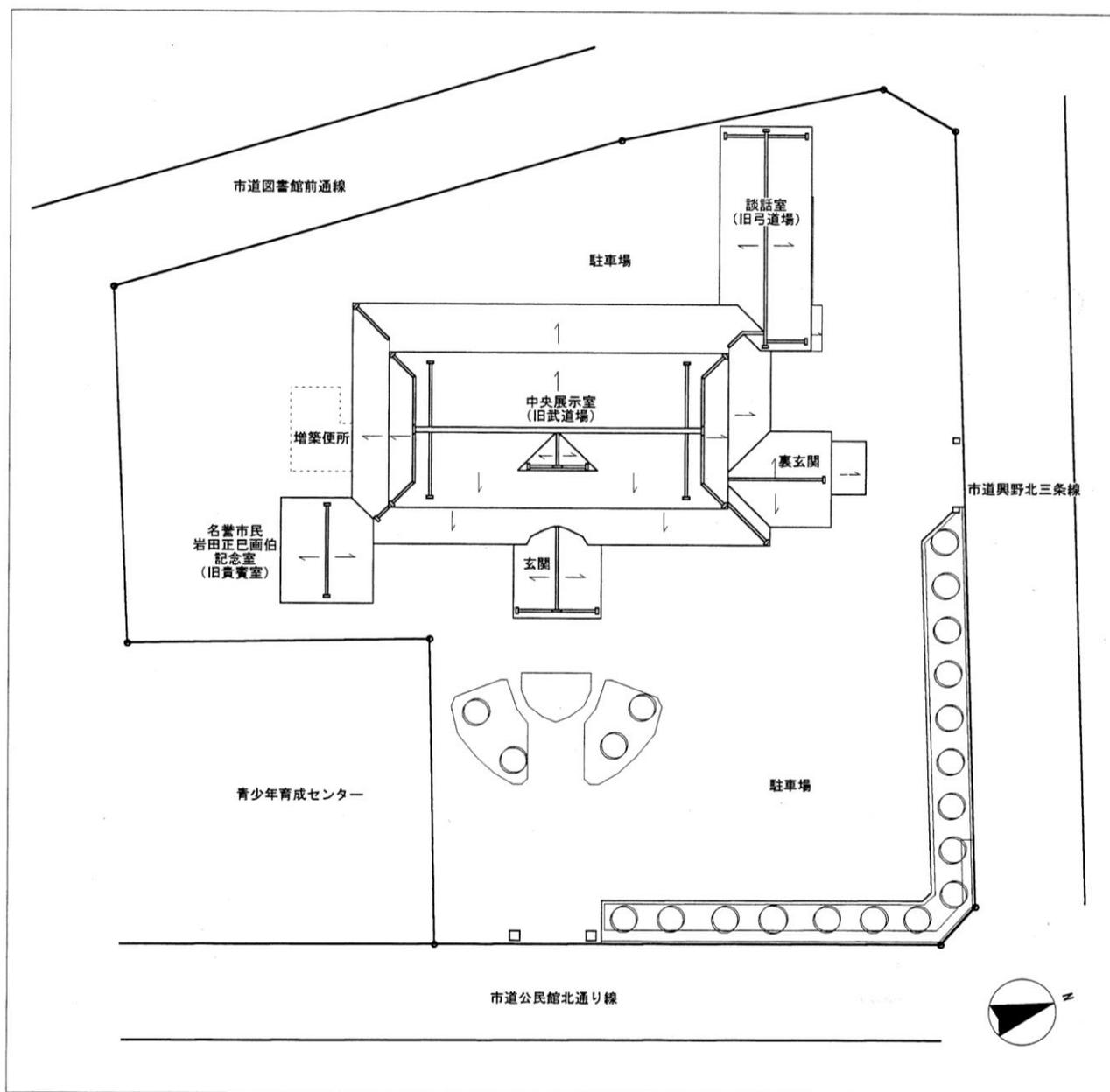
それは簡素ながら雄大で力強い意匠と構造は当時の日本の精神風土を反映し、武道鍛錬の場として取り入れられたことは容易に想像できる。現にその頃、全国各地で武徳殿の建設が進められていた。

これらの武徳殿はその時代背景により戦後数多く失われたと思われるが、その意匠性において、日本建築史の流れの中で一画を占めるものと評価される。三条市の旧武徳殿は当初の骨格がほぼ残り、昭和初期の日本の時代性を表す現存建物として貴重である。

元新潟市文化財保護審議会委員 山崎完一



三條市歴史民俗産業資料館（旧武徳殿）案内図



三条市歴史民俗産業資料館（旧武徳殿） 現況平面図 1:500



中央展示棟
(旧武道場)

正面 (東側)



正面



斜正面



右側面（南側）

手前建物は
平成元年建築の
新設便所



背面（西側）



玄関見上



玄関の鬘股



中央展示室
(旧武道場)

内部



内部見上



背面（西側）

廻廊



正面（東側）



談話室
(旧弓道場)

南面



北面



西面



内部



記念室
(旧貴賓室)

北東面外観



南西面外観



内部前廊下



内部

床の間側



内部

前廊下側



裏玄関

外観



内観